

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	星野一郎教授を偲ぶ
Author(s)	藤井, 秀樹
Citation	広島大学マネジメント研究, 21 : 2 - 3
Issue Date	2020-03-26
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048986
Right	Copyright (c) 2020 by Author
Relation	



星野一郎教授を偲ぶ

京都大学大学院教授 藤井秀樹

1 インスパイアの源泉

一篇の冊子を傍らに置いてこの一文を書いている。表紙には、「映画からの知恵—インスパイアの源泉」と記されている。著者は星野一郎教授である。

星野教授によれば、この冊子は、「作成者〔…中略〕の嗜好〔で〕または偶然に鑑賞した映画のなかの印象的な台詞を集めたもの」（1頁）である。ワープロ打ちのA4版の原稿を仮製本した一冊で、当然とすべきか、非売品である。しかし、目次、はしがき、表記上の注意事項が配されるなど、あたかも市販の学術書のような体裁が施されている。収録されているのは314本の映画からの「引用」(quotes)である。台詞は原則としてすべて原語（英語）で引用され、翻訳（日本語）が添えられている¹。原稿に付された総計1,060件の脚注では、各台詞の背景事情や解釈・評価が詳細に記述されている。そしてさらに各映画自体の出来栄が、6段階（AA：秀逸～D：不出来）で評価されている。総頁数は359頁に及ぶ。市販本に組み直せば、500頁近い大著になるであろう。

「藤井さん、私の『映画からの知恵』について書いてくれませんか」。編集部から追悼文の執筆依頼を受けた折り、星野教授のそんな言葉が聞こえてくるような思いに誘われ、ごく自然に書き起こしの一文が決まった。

2 出合いの頃

1990年9月11日（火）の午後6時半から、JR国分寺駅ビル8階の銀座LIONで、醍醐聰・田中建二編著『現代会計の構想』（中央経済社、1990年9月刊）の出版祝賀会が、同書の執筆者を集めて行われた。この祝賀会で、筆者は星野教授と初めてお会いした。会場が国分寺だったのは、日本会計研究学会第49回大会が同年9月11～13日に東京経済大学で開催されたからである。学会参加のついでであれば執筆者も集まりやすいであろうという主催者の配慮であった。

星野教授は当時、中央大学大学院商学研究科博士後期課程に在学する傍ら、日本学術振興会特別研究員として会計研究に勤しんでいた。奇しくも筆者と同じ年齢であった。だからであろうか、初対面の瞬間から彼は筆者を「藤井さん」と人懐っこく（馴れ馴れしく）呼んだ。それは終生変わることがなかった。

その後の星野教授の旺盛な研究活動には、瞠目するばかりであった。1998年からの約20年間に6冊の単著を上梓した。10年に単著1冊の刊行が目標とされるわが国の会計学界において、これは驚異的な業績である。2011年に5冊目の単著『財務会計ルール論の論理と政策』（中央経済社）が出版されたとき、同書の書評を書いてくれないかと、星野教授から筆者に依頼があった²。

3 5冊目の単著で語られたこと

「すべてが関連し、作用し合っている」（未来世紀ブラジル）、「重要なのは一何事も理由があって起こることだ」（マトリックス・ディローディ）。『財務会計ルール論の論理と政策』は、このような映画の台詞の引用から始まり、「ルールは変えられるんだ」（ダイ・ハード4.0）、「不正はわれわれを守る」（シリアナ）といった映画の台詞の引用で締め括られている。会計の学術書としては異例の構成である。このような新たな「出合い」があって、星野教授と期せずして「映画」で話が弾み、くだんの大著を拝受することになった。

5冊目の上掲単著では、おおむね次のようなことが書かれている。財務会計ルールは人間およびその集合体である企業の本性の反映であるがゆえに、そこには様々な夾雑物が不断に胚胎する。したがって、

「あそび」, 「いいかげんなもの」, そして「不正」さえもが, 「適度」なものである限り, 財務会計ルールの円滑な機能や進化にとって無くてはならないものになる。

このような主張を行う上で, 映画の台詞の引用が有効であると, 星野教授は考えたのであろう。そのような表現手法を用いることで, 学問の堅苦しい制約や垣根を軽快に飛び越え, 独自の発想を自由に展開することが可能になる。映画の台詞が文字通り, 「インスパイアの源泉」として機能するのである。上掲書で語られているようなことをインスパイアする源泉は, 筆者の知る限り, 会計の世界には存在しない。

そのように考えると, 星野教授が, 「刊行の予定はない」と言いつつ, 『映画からの知恵』の編纂に打ち込んだ理由が見えてくるような気がする。彼は, 自身の「インスパイアの源泉」を探し求めて, 何かに憑かれたように, 大著の編纂に日々没頭したのではないか。大著に迸る執拗な(病的とも言える)緻密と徹底は, そのように考えると説明がつく。

4 日本会計研究学会第78回大会にて

2019年9月6～9日, 神戸学院大学において, 日本会計研究学会第78回大会が開催された。7日(土)の午前中の評議員会が終わったあと, 筆者は星野教授と共に会員総会会場の神戸国際会議場1階メインホールに向かった。ところが会場に着くと, 星野教授は, 「これから内職。今, もう一冊本を書いていることです」と言って, 鞆からラップトップを取り出し, ロビーの片隅にエスケープした。「先生はもうたくさん本を書いているのだから, 少し休んだらどうですか」という筆者の言葉には, ただ笑って答えた。それが, 星野教授と共有した最後の時間になった。

星野教授とは日本会計研究学会で初めて出会い, 日本会計研究学会で最後のお別れをしたことになる。会計研究者同士の邂逅とは, そんなものかもしれない。今はただ, 星野教授の早すぎる逝去を悼み, 衷心よりご冥福をお祈りするばかりである。

¹ ただし, 英語の台詞が入手できない場合や邦画の場合, 英語の台詞は記されていない。

² この書評は, 『産業経理』第72巻第1号(2012年4月)に掲載された。